

遊星人の海外研究記 その17 ～碧海と上海で見た景色～

荻原 正博¹

1.はじめに

2014年4月から2年間フランスのニースに滞在し、2021年12月から中国の上海に滞在している。それぞれの渡航に至る経緯や準備、現地での生活について紹介する。本稿が、特に将来海外に行く可能性のある学生やポストドクの方々の参考になれば幸いである。

2.ニース編

2.1 経緯と準備

学位取得後、名古屋大学のTa研で学振PDとしてお世話になっていたが、2年目が終わる頃、次の行き先を考える時期になり、とりあえず海外学振に応募することにした。海外生活に特別な憧れがあったわけではないため、特定の目当ての行き先があったわけではないが、論文の共著者になってくれたことがあるMorbideilli氏がいるニースが良いと思った。連絡したところ最初は受け入れを断られてしまったものの、なんとか粘って受け入れの許可を得た。どんな人でも海外に行く可能性はあるし、学生やポストドクのうちから海外の研究者と知り合い、仲良くなっていくことは意味があると思う。

無事採用が決まった後の関門はビザの取得である。私は「能力・才能ビザ」という特殊なビザを取得したためか、準備が非常に大変だった。たとえば、申請には警察庁が発行する犯罪経歴証明書が必要だが、この証明書を取得するためにまずフランス大使

館で「犯罪経歴証明書を要求するレター」を発行してもらう必要があった。このレターの発行に1か月かかり、その後、警察本部に出向いて申請を行い、さらに発行までに2週間を要した。このような手続きを含め、ビザ取得には合計で約4か月かかった。なおビザ準備の際、以前フランスで研究していた方々の情報が大いに役立ったので、海外生活の準備を始める際にはまず先人に連絡を取ることがおすすめである。

現地の生活で最低限必要な物品については、私は国際小包のSAL便で3ケース送った。中身は研究に必要なもの(教科書や重要な資料)や日用品(食品ラップ、爪切りなど)だったと記憶している。荷物が荒く扱われると聞いていたので、ケースをガムテープでぐるぐる巻きに補強し、頑丈に梱包したつもりだったが、それでも届いたときには無惨な姿になっていた。

2.2 到着と生活基盤の整備

そしていよいよ2014年4月、当時住んでいた名古屋を出発し、ニースへと旅立った。途中、成田とパリを経由してニース空港に到着したのは夜の20時頃だった。荷物を受け取り、空港の到着ロビーに出ると、Morbideilli氏が迎えに来てくれており、そこで握手した瞬間を今でも鮮明に覚えている。「やってやるぞという気概」と「うまくいくだろうかという不安」が入り混じる中、私を乗せた車はニースの有名な海岸通りを走り抜けていった。

海外生活の最初の壁は住む場所探しだろう。私の場合、事前にMorbideilli氏に相談したところ、彼がいくつか物件を探し出し、さらに内見まで済ませてくれていた。特に日本人が少ない地域では住居探しは

1. 上海交通大学・李政道研究所
ogihara@sjtu.edu.cn

大変なため、この配慮は本当にありがたかった。このおかげで、ニース到着時点でアパートはすでに決定しており、空港からそのままアパートに入居することができた。ちなみにアパートは1DKで家賃は700ユーロ。最上階の5階だったため、夏場は非常に暑かったがクーラーはなかった。風呂とベッドルームが一体化している部屋で最初は少し戸惑ったのだが、冬は効率的に加湿ができ、風呂掃除も簡単なので最終的にはけっこうお気に入りになった。

次のハードルは、生活に必要な契約関係だ。ここでも私は人に頼りまくった。銀行口座の開設には予約が必要だったが、研究所の学生に予約してもらい、実際に同行してもらった。電気・水道の契約はネットで完了できたが、これはMorbidelli氏にやってもらった。携帯電話の契約については、研究所の学生に聞いてネットで申し込みできた。こうして頼れるところには全力で頼ることで、契約関係は問題なく整備できた。ちなみに、滞在許可証の取得にはかなり苦労したが、あまりに大変だったのでここでは割愛する。

2.3 研究環境

滞在先であるニース天文台(正式にはコートダジュール天文台、ニースモデルが誕生したきっかけとなった場所でもある)は、一言で言えば素晴らしい環境にあった。天文台はニース市内にある小さなモンテロ山の上に位置し、地中海・ニース市街・アルプスを見渡せる絶景が広がっている。私のオフィスは、パリのオペラ座を設計した建築家ガルニエの手による建物の一室であり、そこからこの壮大な景色を一

望できた。疲れた時には外を眺めることで簡単にリフレッシュできる。間違いなく、人生でナンバーワンオフィスだ。ちなみに地中海の景色は、流れ込む川や風、光の具合によって日々表情を変え、一日として同じ姿を見せず、2年間毎日見ても見飽きることがなかった(図1)。

ニース天文台をさらに素晴らしい環境しているのがレストランだ。専属のシェフが毎日異なる料理を用意してくれ、前菜、主菜・副菜、チーズまたはヨーグルト、デザート、そしてコーヒーと、コース料理の形式で提供される。料金は給料に応じて変わる仕組みで、私は当初3ユーロほど支払っていたが、途中でそこそこの給料をもらっていると気づかれてしまい5ユーロほどに値上げされた。それでも破格の値段だ。うさぎ肉やムール貝など日本ではあまり目にしない料理も出て、ワインやビールを飲むこともある。毎日ワインを1本空けるおじさんもいた(注:ランチである)。10人ほどで大きなテーブルを囲むスタイルで、良い社交場でもあり、フランス語の練習にもなった。

研究生活について振り返ると、自由な時間がかなり多かったように思う。惑星グループのセミナーは週に一度開催され、優雅に紅茶を飲みながらのスタイルだった。研究所全体のセミナーも月に1回程度出席した記憶があるが、それ以外は基本的に自由時間であり、研究に集中できる環境だった。Morbidelli氏との議論は平均すると数週間に1回ほどのペースで行っていた。よくビジターが来ていたので、イレギュラーなセミナーは多かったかもしれない。

日本と比較した研究スタイルの違いとしては、研究者の時間の使い方がある。朝9時や10時に出勤し、夕方17時から18時には帰宅する人が多く、概して研究所での滞在時間は短い。研究所のルールで滞在時間が平日8時から20時に制限されていたため、そもそも長時間の滞在は不可能だった。従って研究室滞在時間は日本と比べると短くなってしまうのだが、それにもかかわらず成果を出せる理由は、主に二つだと思われる。一つは、圧倒的に効率が良いことだ。例えば、Morbidelli氏と一緒にロンドンへ出張したことがあったのだが、2時間あまりの飛行時間でレフェリー業務をすべて片付けたのには驚かされた。もう一つは、何のことはない、研究を家で行っているのだ。長期のバカンス時は完全に研究から離れる場合



図1 天文台から望むニース市街と地中海。

も多いが、それ以外は夜でも土日でもけっこう研究をしている人がある。

海外学振での滞在期間は2年と限られていたため、やることとやらないことを意識して過ごすよう努めた。やることは当然ながら研究であり、さらにフランスならではの有意義な体験(例えば旅行など)もできる範囲でやろうと思っていた。一方で、やらないことはそれ以外である。例えば、日本人の友達作りは意識的に避けた。もちろん、人それぞれ優先することは異なる。日本人の友達作りが精神的安定につながる人にとってはむしろ必須だろう。とにかく時間は有限であり、特に海外生活の期間は人生でも貴重な時間である。優先順位を明確にし、限られた時間をどう使うかを意識することが重要だと思う。

2.4 生活環境

ニースでの食生活についてだが、朝はクロワッサンかパンオショコラをパン屋で買うことから始まる。パン屋は至るところにあり、2年間の滞在ですっかりパン好きになった。帰国後も美味しいクロワッサンを探すのが趣味になっている。ちなみに、武蔵境にあるバサージュ・ア・ニヴォの焼き立てクロワッサンが個人的にお気に入りだ。夜は基本的に自炊だったが、ほぼ100%がパスタで、これに合わせて毎週1本のワインも飲んでいて、ちなみに2年間毎日ワインを飲み続けたが、ワインの香りや味わいなどの微妙な表現についてはついに最後までよくわからなかった。(でも、ボルドーのサンテミリオンは美味しいと思うので、今でも時々買っている。)日本食屋もいくつかあったが、日常的に通える値段ではなく、そもそも一人で行くには少し場違いな感じなため、ほとんど利用しなかった。

土日は、精神の健康を保つために外出するよう心がけていた。予定がない日には、20分ほど歩いて海岸まで行き、ぽーっと碧い海を眺める。気が向けば、モナコ、エズ、カンヌといった近隣の街に出かけることもあった。また、長期休暇や日本から友人が訪ねてきた際(2年間で10組ほど来てくれた)には、フランス国内や周辺諸国を旅行した。ミシュラン星付きレストランの古城に宿泊したり、モンブランでモンブランを食べたり、サハラ砂漠で星空を眺めたり、フランスオークスを観戦したりと、2年間でかなり楽しんだと



図2 天文台の仲間とともに。

思う。

楽しい思い出が多い一方で、影には数々の失敗もあった。スーパーでの買い物の仕方が分からずに店員に呆れられたり、レンタカーでドライブ中に高速道路に迷い込み、料金所で大渋滞を引き起こしたりした。大人なら当然できるべきことができないのは、些細なことでもけっこう心にダメージを与える。また、散髪でも苦労した。日本人特有の髪質や頭の形に慣れていない理容師が多く、何度か奇妙な髪型にされてしまった。最初の数回は学生にお願いして連れて行ってもらったが、学生が行く激安床屋はリスクが大きいことに気づき、中盤以降はガス惑星の構造研究で有名なGuillot氏の行きつけの床屋に落ち着いた。それでも微妙な仕上がりになることが多かった(図2)。

以上がニース滞在の記憶である。滞在許可証の取得に加えて、銀行口座の解約でも大きなトラブルになり、また滞在中にフランスが戦争状態になったりもしたが、無事に帰国できた。滞在中に重要な論文をいくつか執筆できたこと[1-3]、帰国後もニースの方々と共同研究が続いていることを考えると、この滞在は成功だったと言えるだろう。

3. 上海編

3.1 経緯と準備

フランスから帰国後、天文台フェローとして国立天文台に勤務していた。5年の任期が残り少なくなった頃、いくつかの公募に応募する中で、上海交通大学・李政道研究所(以下TDLI)の公募が目にとまった。当初、海外に行くつもりはなかったが、いくつかの条

件(具体的には、国際的な研究所を目指していること、上海が日本から近くまた中国の中で最も国際的な都市であること、そして以前TDLI主催の国際会議に参加したことでTDLIの雰囲気を知っていたことなど)が悪くなかったことから応募してみることにした。

幸運なことに採用委員会の目に留まり、オファーを頂いた。ちなみにTDLIの採用審査はアメリカ式でかなりしっかり行われる。公開・非公開を含む30-60分程度のセミナーを3回実施し、一対一の面談は5回以上行った。この過程で多角的に評価されるほか、推薦書の内容も非常に重視される。そのため、世界的な研究者からのポジティブな推薦書を得ることが少なくともTDLIでは有効である。私の場合、コロナ禍だったため、すべての審査がZoomを通して行われたが、現在では通常、研究所に数日滞在して審査を受ける形になっている。オファーを受けるかどうかについては非常に悩んだ。私自身にとっても将来を左右する大きな決断だったが、日本で優良企業に勤めていた妻にとってはさらに大きな決断だった。色々な人の意見を参考にし、最終的にオファーを受諾することにした。このような人生の転機を受け入れてくれた家族には感謝している。

採用決定後にまずやるべきことはビザの取得である。フランスでの経験から、今回大変だろうと覚悟していたが、実際にはそれほど苦労しなかった。フランスのビザ取得で要求された納税証明書や犯罪経歴証明書、志望動機書などは不要で、必要書類も少なかった。中国大使館で予約不要で申請でき、特に問題無く申請が受理された。本格的なビザ準備から取得まで1か月もかからなかったと記憶している。(なお当時はビザ申請に必要な招聘状の発行を中国政府が厳しく制限していたのだが、TDLIは上海においても優先されていたので幸運だった。)

荷物については、フランス渡航時と同様、必要そうなものを小包で送った。研究に使うものを含めて、全部で10ケース程度だったと思う。フランス渡航時と比べて郵送時の内容物チェックが非常に厳しくなっており、洗濯洗剤を入れていたところ危険物扱いになるとして発送を拒否された。ちなみに日本製の洗剤が好きで入れたのだが、後で分かったこととして、中国では日本で売られている日用品のほとん



図3 TDLIの建物。日本の建築会社の設計である。

どが手に入るため、実際にはわざわざ送る必要はなかった。

3.2 到着と生活基盤の整備

いよいよ2021年12月、上海への出発を迎えた。当時の中国は厳しい入国規制を敷いていた。まず、日本からの飛行機に搭乗するために、搭乗48時間以内のPCR検査と血液抗体検査の陰性証明が必要だった。そして中国に到着すると、厳しい隔離措置が待ち受けていた。当時は到着地に依じて2-4週間の隔離が必要で、上海市では2週間の強制隔離と1週間の自主隔離というルールだった。隔離ホテルは予想以上に広く、日本語が通じるスタッフもおり、ウォシュレットも完備されていたとはいえ、提供される食事に徐々に飽きてくるなどけっこう辛かった。2週間の隔離中、計3回のPCR検査と1回の血液抗体検査を受け、すべて陰性となって無事に強制隔離がクリアとなる。ちなみにこの2週間の隔離時に、遊星人の記事[4]を執筆した。

その後、1週間の自主隔離を行ったが、この自主隔離は比較的ゆるく、自分で予約したホテルで1週間を過ごせば良かった。最後にPCR検査を受け、晴れて自由の身となったのは、2021年のクリスマスであった。そしてその日にTDLIに初出勤した。新しく建設された研究所は想像以上に大きく、やや圧倒されたことを記憶している(図3)。そして何より驚かされたのは、そこはコロナ禍とは思えない状況だったことだ。誰もマスクをしておらず、セミナーは対面で行われ、学食ではみんなが一緒に食事をしていた。不思議な感覚を覚えつつ、新しい拠点での研究生活が始まった。

住居については、自主隔離期間中にいくつか内見し、研究所近くに部屋を借りることにした。上海には日本人専門の不動産仲介会社があり、少々割高だが日本人のニーズを熟知している。日本のウォシュレットや浄水器を追加で設置してもらったし、また賃貸中に問題があればすぐに解決してくれるのでとても助かった。最初に借りた部屋は小さめの2LDKで、家賃は8500元(17万円)。ちなみに上海の不動産価格は東京の1.5倍程度である。最初の契約時には仲介手数料を含めて4か月分を前払いする必要がある、これを現金で支払ったところ、大家に大いに驚かれた。完全キャッシュレス社会の中国では、現金を使う人はほぼおらず、現金を見たのは数年ぶりとのことだった。ちなみに現在は、家賃は同じだがちょっと良い部屋に引っ越している。そこはエアコン、水回り、給湯・床暖房などの設備が日本製で、マンションの管理人にも日本語を話せる人がいる。

その他の契約も特に問題がなかった。銀行ではどの支店でも銀行員が英語を話せるため、口座の開設は簡単だった。携帯電話の契約は近所の携帯ショップで行ったが、こちらでは英語が通じなかったため、翻訳アプリを使いながら対応してもらった。ちなみに、上海の日本人街のショップでは日本語を話せる店員がいるので、もっと簡単に契約できる。労働許可や滞在許可については、研究所の担当秘書の指示通りに移民局に行き、特にトラブル無く進んだ。フランス滞在許可の取得が大変すぎたこともあり、それに比べると余計に楽だと感じたのかもしれない。

3.3 研究環境

TDLI(李政道研究所)は、ノーベル物理学賞受賞者である李政道が基礎物理学研究所の設立を習近平に提案したことをきっかけに、2016年に上海交通大学に設立された。目標は世界をリードする研究所になることで、初代所長にノーベル物理学賞受賞者のWilczek氏を迎え、現在の二代目所長は前上海交通大学学長のZhang氏が務めている。公用語は英語であり、ファカルティの約40%が外国人である。私が所属する天文部門にはファカルティとしてブラックホールを研究する水野氏がおり、以前はポストクとして逢澤氏(茨城大学)も在籍していた。事務職員全員が英語を話せる点も非常にありがたい。

TDLIで特に驚かされたのが寄付の量だ。所長の売り込みが優れているのか、その他の理由があるのかは分からないが、毎年かなりの寄付が集まる。例えば、研究所には中国の大学で最大のスパコンが設置されているが、これは上海交通大学の卒業生からの寄付によるものだ。他にも、天文ドームや休憩スペースなど、寄付で建設された施設がいくつかある。また政府からの支援も強力で、実際に上海市トップが年に1度、科学技術政策のトップが年に数回訪れる。

研究生活は、惑星グループのセミナーに加え、天文部門全体のセミナー、論文セミナー、研究所全体のセミナーがそれぞれ週に1回ある。また、私は年間3単位分の授業を担当している。中国の大学は朝早くから夜遅くまで授業があるのだが、最近担当している授業は18時から20時20分の枠で行っている。この時間は最初は大変だと感じたが、日中の研究時間に影響しないため、今では気に入っている。なお一回135分の授業を16回で3単位となり、1回の授業時間が長くてこれも最初はしんどかったが、今はもう慣れた。セミナーや授業以外の時間は、学生やポストクとの議論、自分の研究、共同研究に使える。運営の仕事もあるが、日本の大学教員と比べると負担は軽いと思う。この理由の一つは事務員が多くの業務をカバーしてくれるためであろう。

中国での仕事の進め方は日本と異なる点も多い。ほとんどの連絡がWeChat(中国版LINE)で行われ、授業やセミナーの連絡、研究の議論、秘書との連絡、運営に関わることなど、すべてがこのアプリを通じて行われる。即レスが基本で、夜間や土日にもメッセージが来る。事務員が土日や夜間も対応しているのを見て、大変そうだなと思うこともあるが、結果的に仕事のスピードが格段に上がる。依頼や締め切りが突然やってくるのも中国ならではの特徴だろう。「明日までに研究申請書を準備して」「明日1時間のセミナー発表をして」といった依頼が日常茶飯事だ。最初は戸惑ったが、今では「あまたか」と割り切れるようになった。このような環境では、80%の完成度でもひとまずスタートし、後から調整するというスタイルとなる。

最後に学生のキャリアについても触れておきたい。中国は学歴社会であり、卒業した大学名が極めて重要視される。清華大学と北京大学が国内トップであ

り、次いで上海交通大学を含む数校が続く。ただし、アメリカの有名大学はこれらよりもさらに高い評価を受ける。そのため、中国トップクラスの学部生は、大学院でアメリカの大学に留学することが一般的だ。(我々のグループでも、過去3年間で数人の学部生を海外の超有名大学に送り出している。ちなみに研究経験があると有利であり、学部3年生で筆頭論文を書くことも珍しくない。)次の層が清華大学や北京大学に進学する。結果として、中国第3位の上海交通大学でも、優秀な大学院生を確保するのが簡単ではないのだ。

3.4 生活環境

上海生活で特に良いと感じるのは、食生活にほとんど困らない点だろう。上海ならではの小籠包や上海蟹といった中華料理はもちろん美味しいが、日本食が簡単に手に入るのが日本人にとって嬉しい。牛丼、ラーメン、寿司、うなぎ、カレー、とんかつ、焼肉など、日本のチェーン店が豊富にあり、居酒屋やカフェも揃っている。価格は日本とほぼ同じくらいだが、ビールは日本より安く、アサヒ生ビールが20元(400円)で飲めるのはありがたい。私は最近では二郎系ラーメンにはまっている。ちなみに平日ランチは研究所の学食を利用しているが、こちらも1食10元(200円)程度と家計に優しい。学食は朝から夜まで営業しており、土日も開いている。

日常生活は何でもスマホで完結するようになっており、とても便利だ。例えば、スーパーの商品は注文から30分以内に無料で部屋の前まで配達される。ウーバーイーツの中国版を利用すれば、ほとんどのレストランの料理を頼むことができ、配達料を入れても実店舗で食べるよりも安い場合が多い。実店舗に行く場合も、スマホでモバイルオーダーを使うのが一般的なので、中国語を話す必要がない。同じ仕組みで薬も薬局から配達される。処方箋が必要な場合でも、医師とオンラインでチャットを行った後すぐに配達される。日用品についても、中国版アマゾンであるタオバオで何でも揃う。日本製の日用品も大抵手に入り、価格も日本で買うのとそれほど変わらない。移動はウーバーの中国版DiDiを利用することが多い。近年はDiDiは安全面に配慮しており、車内音声の記録が行われるなど一般のタクシーより快適かつ安

心して利用できる上、料金も安い。医療面では、中国の一般病院は混雑するが、上海の外資系病院は比較的空いており、日本人医師が常駐している病院も複数ある。フランスで失敗を繰り返した散髪については、中国ではなるべく日本人らしくありたいと思っているので、日系の美容室を利用している。オークラホテル内の美容室だが、料金は300元(6000円)で目玉が飛び出すほど高くない。上海には3万5000人の日本人が住んでおり、このように日本人向けの施設やサービスが充実しているのである。ちなみに北京に住む日本人は5000人である。

日常生活の楽しみとして、ニュースでは美しい景色や近隣への小旅行を楽しんだが、上海ではそれが難しい。代わりに、日本のアーティストやお笑いのライブ(LiSA、森山直太朗、吉本)に行ったり、日本映画を見に行ったりしている。遠出の旅行については、いまのところ張家界(映画アバターの世界となった場所)や雲南省に行った程度である。麗江や九寨溝、新疆など、訪れてみたい場所が多いが、上海からかなり遠いため、逡巡してしまっている。

3.5 ロックダウン

ここまで読んで「なんだ上海生活は簡単そうだ」と思ってもらえるかもしれないが、もちろん大変なこともあった。その最たるものが、2022年3月末から始まったロックダウンだろう。中国入国から3か月が経ち、桜が咲き、散歩にちょうど良い気温になった頃、上海は突然ロックダウンされた。

その日、いつものように朝起きて出勤しようとマンションの1階まで降りると、そこにはバリケードがあり、外に出られなくなっていた(図4)。最初は数日間の閉鎖という予定だったが、結果的に2か月に及ぶ長期ロックダウンとなった。最初の1か月間は特に厳格な規制が敷かれ、住居だけでなく、レストランを含む商業施設も完全に閉鎖された。便利なネットスーパーやウーバーイーツ、タオバオに依存した生活は一変し、生活必需品を手に入れるのが困難になった。

ネットスーパーは限られた在庫と配達員で営業を続けていたが、需要と供給のバランスが崩れ、毎日定時に行われる注文受付は激しい争奪戦となった。私達は朝6時注文開始のスーパーを利用しており、5時50分には起きて注文画面をスタンバイ。6時と同



図4 ロックダウンされたマンションの1階にて。

時にスマホを連打することで朝を迎える日々が続いた。それだけでは必要な物資が揃わないため、他の方法もある。一つ目は政府からの配給だ。米、野菜、卵などが約2週間に1回支給され、最低限の食料は確保できた。二つ目の方法が住民同士の譲り合いである。マンションでは各階ごとにWeChatグループが作られ、「コーラ余っているけどいる?」「どなたかシャンプーを分けていただけませんか?」といったやり取りが行われた。私達も近隣の方々から色々わけてもらった。三つ目の方法は「団体購入」だ。ロックダウン開始後しばらくすると、スーパーだけでなく限られた商店が営業を開始するようになってきた。ただし、商店が営業を再開した後も個人向けの販売はなく、まとまった数の注文が必要だった。このため、マンション内の住民で購入を取りまとめて注文し、商店がマンション入り口まで配送するという方法で対応していた。そんなこんなで、2ヶ月程を耐え忍び、5月末頃から規制が徐々に緩和され、ようやく自由の身になったのである。桜の咲く頃にロックダウンされたのだが、外に出られるようになった頃にはすでに夏の陽気だった。

このロックダウンは大きなストレスだったが、とはいえ、私は意外と恵まれていたかもしれない。食料の調達で頑張ってくれたのは妻であるし、また隣人の方々にも様々な面で助けられた。特に、隣の部屋に住む日本語が話せる若い夫婦は事あるごとに私達を気にかけてくれた。ロックダウン中盤で心が折れそうになっていた頃、「私たち中国人でもこのロックダウンはつらいのに、あなたたちは外国人でよく頑張っている」と励ましの言葉をかけてもらったことは、今でも心に残っている。やはりどんな時でも人に頼って生きていくものだ。

3.6 中国ってどんな国?

皆さんは中国に対してどのような印象を持っているだろうか。日本では中国に関するニュースがネガティブに伝えられることが多い。一方で、中国は科学の基礎研究を重視する珍しい国であり、科学予算は毎年10%程度増加している。結果として、天文学科の新設が有名大学(復旦大学、山東大学、西湖大学など)で進んでおり、10年後には中国の天文研究が現在の倍以上の規模に拡大していてもおかしくない。また、北京大学が8m、清華大学が6.5m、上海交通大学が4.4mの望遠鏡を建設中であり、系外惑星宇宙望遠鏡や太陽系探査プロジェクトも複数進行している。このような発展を見ると、うまく中国と協力し、その勢いに相乗りできればメリットが大きいかもしれない。だがしかし、中国が恐ろしい国で、協力するリスクの方が大きいとするならばそうはいかないだろう。では実際、中国はどのような国なのだろうか?

私は簡単な答えを持っているわけではないが、フランスと中国の2か国に長期滞在した経験から感じたことはある。規模の小さな話ではあるが、治安について。ニュースでは、1年以上滞在した人の7割程度が未遂を含めスリの被害に遭うのではないと思う。私自身も強盗に近い窃盗を経験した。また、市内では数か月に一度発砲事件が起き、私が滞在中にもアパートから100mの距離で発砲事件が発生した。さらに、130名以上の犠牲者を出した2015年のパリの同時多発テロをきっかけにフランスは戦争状態となった。また、私が帰国した数か月後にはニュースで80名以上が犠牲となるテロが起きた。これと比較すると上海は安全である。過去3年間、少なくとも私が犯罪に巻き込まれたことは一度もない。日本と同様に、カフェの机にPCを置いたままトイレに行く人は多く、地下鉄で眠っても何も起きない。またこれも規模の小さな話であるが、生活に関しては、特に日本人が多い上海では他のどの国よりも日本に近い生活が可能だ。

もちろん、私の経験は限られた環境でのものであり、本稿に書かないネガティブな面も存在するだろ

う。しかし、中国での生活が他の国以上にメリットを得られる人も多いかもしれないと感じる。特にポストドクの場合、日本と比べて給与が高い(例えば、西湖大学の系外惑星分野では年収5万ドル以上で公募がある)ため、金銭面で心配なく研究に集中できる環境を魅力的だと思う人もいるだろう。なにはともあれ、特に中国の場合は来てみないと知り得ないことが多いので、ぜひ実際に訪れ、最新の研究や発展計画に接してみることをお勧めしたい。日本から上海は非常に近いし、TDLIはいつでも訪問を歓迎している。特に、学生向けには短期・長期の滞在プログラムも用意されているので(TDLI internをキーワードに検索)、興味がある方はぜひ私に連絡してほしい。

4. おわりに

ニースと上海での滞在において共通する学習点を見つけられるとしたならば、まずは人に頼ることだろう。ニースでの立ち上げでは人に頼らなければもっと時間がかかったであろうし、上海でも様々な場面で助けられている。現職に採用された大きな理由も推薦書である。人に頼るためには、その相手に受け入

れられなければならないので、そのための人間関係作りは大切かもしれない。もう一つは、外国に住むことは新たな発見があるということだろう。フランスは以前に何回も訪問したことがあったが、それでもフランスの美しい景色や文化には驚かされたし、中国の便利さは噂には聞いていたが実際は予想を上回った。機会があれば外国に住み、新たな発見をしてみるのも面白いだろう。

いずれの滞在においても家族・友人・先輩・先生など多くの方にお世話になった。ここに感謝したい。また、本稿執筆の機会を与えてくれた黒澤氏にも感謝する。

参考文献

- [1] Ogihara, M. et al., 2015, A&A 578, A36.
- [2] Suzuki, T. K. et al., 2016, A&A 596, A74.
- [3] Izidoro, A. et al., 2017, MNRAS 470, 1750.
- [4] 荻原正博, 2022, 遊星人 31, 31.

著者紹介

荻原 正博



上海交通大学・李政道研究所 テニュアトラック准教授。2011年、東京工業大学大学院理工学研究科修了。博士(理学)。名古屋大学、コートダジュール天文台、国立天文台、東京工業大学を経て、2022年より現職。専門は惑星形成論。